

平成 25 年 4 月 23 日

株式会社 成信
代表取締役社長 根本信男 殿

一般社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長 横田隆司

もと大阪市立精華小学校校舎の保存に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、もと精華小学校／もと精華幼稚園跡地をホテル、物販業、飲食業などで構成する商業施設として開発する計画である由、大阪市の発表により聞き及んでおります。

当地に現存する校舎・園舎は、別紙「見解」に記しますとおり、1929（昭和 4）年に竣工した大阪市内ではきわめて数少ない昭和戦前期の鉄筋コンクリート造学校建築の遺構であり、当時の人々の地域の教育に対する熱意を示した歴史的建造物でもあります。

第二次世界大戦時に大きな被害をうけた大阪市中心部では、近代の歴史を語る戦前の歴史的建造物は特に貴重です。商業地として非常に恵まれた立地ではありますが、その歴史を活かした新たな開発が望まれます。

貴社におかれましては、その価値を十分に認識され、かけがえのない文化遺産を保存し後世に継承していただけるよう、深甚なるご配慮を賜りたく存じます。

なお、本会はこの建造物の保存に関して、技術的支援など、できます範囲でお手伝いさせていただきますと考えておりますことを申し添えます。

今後ともこの優れた建造物と環境の保全に、ご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

敬具

平成 25 年 4 月 23 日

もと大阪市立精華小学校校舎についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部

近代建築部会主査 笠原一人

・建物の概要

大阪市中央区難波 3 丁目に所在する大阪市立精華小学校校舎は、1929（昭和 4）年に竣工した鉄筋コンクリート造地上 4 階地下 1 階の小学校建築である。竣工当時は、延べ面積 8,300 平方メートルの規模を誇る。1930（昭和 5）年 7 月に出版された『改築落成記念』誌には、建築計画は大阪市南区役所、建築実施設計嘱託は増田清と記されている。実質的に設計を担当したのは、大阪市の鉄筋コンクリート造小学校を最も多く手がけた増田清だと考えられる。

小学校だけでなく、1887（明治 20）年に設置した保育科に始まる精華幼稚園が併設され、さらに、名前や組織はめまぐるしく変わっているが、裁縫学校や実業補習学校なども併置されており、まさに幅広く地域のニーズに応える教育機関であった。

昭和 40 年代に幼稚園部分（南棟）に 2 階が増築された。また北棟 4 階の講堂舞台の拡張や、開口部のスチールサッシュがアルミサッシュへ取り替えられるなどのいくつかの改変が見られるが、全体としては竣工当時の様子をよく残している。

小学校としては、児童数の減少によって 1995（平成 7）年 3 月に閉校となった。その後は、多くの教室は精華学習ルームとして生涯教育の場に活用され、また 1 階体操場部分は 2004（平成 16）年に改築され、精華小劇場として、実験的演劇の新たなメッカとも認知されていたが、2011（平成 23）年 3 月をもってこれらの利用は停止された。

・昭和戦前期の鉄筋コンクリート造学校建築としての価値

設計者・増田清は 1909（明治 42）年、東京帝国大学工学部建築学科に入学し、構造学の佐野利器に強い影響を受けている。卒業後は安藤組大阪支店に勤務するが、1917（大正 6）年には建築技師として大阪府土木課に入り、大阪医科大学の建設に携わる。1924（大正 13）年に独立して事務所を大阪で設立し、1935（昭和 10）年頃まで大阪を中心に設計活動を展開した。

大正後期以降、大阪市では多くの鉄筋コンクリート造小学校が民間建築家の設計によって建設されたが、増田清は最多の 15 校を建設している。増田は鉄筋コンクリート構造を追求した技術者であったため、その作品は当時としての耐震性を考慮したものとなっており、さまざまな構造的な試みを読み取ることもできる。

精華小学校校舎は、増田による小学校建築の中でも大規模で、高額な工事費がかけられた事例であった。そして、先進的な工夫が見られると同時に、児童への細やかな配慮も感じられる。例えば、4階講堂は、ダイナミックなアーチをあらわにした空間となっているが、仕上げにはコルクが吹き付けられ、音響への配慮が感じられる。講堂とは別に1階には体操室が設けられ、その他、唱歌室、図書室、割烹室、裁縫室などの特別教室も充実し、設備面では、20人乗りのエレベータが2基備えられていた。

建物概要では建築様式は「近代式」と記されているが、低層部の運動場への出入口部分や、最上階の窓にはアーチ型が見られる。また戎橋筋側の玄関部分の幾何学的なデザインや階段の親柱などのモチーフには、アール・デコの影響が感じられる。昭和初期の意匠を端的に示す事例と言えるだろう。

・難波の近代史を体現する建築遺産としての価値

この建物の建設計画が生じた大正期の大阪市では、自治的な地域制度である学区制が残っており、小学校の校舎建設は、市ではなく各学区の資産によって賄われていた。したがって学区の裕福さは校舎の建設費や意匠にも表れた。学区制は1927（昭和2）年に廃止され、精華小学校はその直後の1929（昭和4）年に竣工しているが、建設計画が生じたのは学区制下である。精華小学校の鉄筋コンクリート造による簡素だが重厚で力強い意匠は、学区制下の地域の豊かさや特性が反映された最後の遺産であることを意味している。

第二次世界大戦末期の空襲で、難波周辺は焼け野原となり、耐火構造の建造物のみが残った。南海ビルディング、歌舞伎座、松竹座、そして精華小学校校舎は、かろうじて残ったものの一つであった。もともと繁華街であったこの地域は、戦後、急速に復興を遂げたが、戦前期の記憶を留めるものは少ない。近接する道頓堀境界は、古くから芝居のまちであったが、戦後は大きく姿を変えた。そのような環境の中で、戦前の豊かさを留める精華小学校校舎は、地域の歴史を考える上で、また大阪の近代史を考えても、重要な役割を果たすと考えられる。

閉校後の精華小劇場としての利活用は、新しい文化創造をねらったものであったと同時に、芝居や演劇という道頓堀の歴史との重層も感じられる優れたものであった。また、精華学習ルームは市民利用施設として人気が高かったが、それは建設関係者の「地域の学校」への思いを継承していると言える。戎橋筋商店街側からは小学校の存在はほとんど感じられないが、東側の校庭側から見る時、都心の貴重な空地として、防災上の役割も感じられる。交通の便もよく、商業地としての価値も非常に高い立地である。多角的な検討のもと、歴史的、地域的特徴を体現したこの建物について、イメージだけの継承にとどめず、オリジナルの建物そのものの文化財価値を維持・保存し、活用した計画を期待する。